

中山平次郎の大宰府古瓦研究

なかやまへいじろう

こがわら

九州帝国大学医学部教授の中山平次郎は、黎明期にあつた九州の考古学の基礎をつくったことで、よく知られています。中山の業績は弥生時代（中山自身は先史時代原史時代中間間といっています）の設定、石器製作生産システムの研究、金印研究、漢鏡研究、鴻臚館の所在地の究明、博多研究など多岐にわたっています。大宰府出土の古瓦についても大きな業績を残しています。

中山の大宰府古瓦への関心は、鴻臚館出土瓦の時代考証や、蔵司に散布していた鉄板の小片の性格究明のために、大宰府を頻繁に訪れたところから始まっています。古瓦に関する論文としては、安楽寺跡（現在の太宰府天満宮）出土の周縁に唐草文をめぐらす軒丸瓦を奈良時代前期のものだと判断し、安楽寺の創建年代がさかのぼるのではないかと論じた「畸形的小葉を有せる疏瓦當蓮華紋」（『考古学雑誌』6巻3号、1915年）が最初ですが、次号から翌年にかけて『考古学雑誌』に「古瓦類雑考」を9回連載しています。「古瓦類雑考」は大宰府出土の古瓦だけを対象にしたものではありません。鴻臚館出土と同じ形式の華瓦今

太宰府人物志

資料室だより ⑦

の鴻臚館式軒平瓦）を大宰府に求めていることは当然ですが、宇佐弥勒寺や豊前国分寺、基肄城・高祖山（怡土城）、そして大宰府の諸遺跡の資料も網羅されています。また瓦当文様の華やかな軒丸瓦・軒平瓦ばかりでなく、安楽寺・観世音寺・平井・賀茂などの文字瓦にも大きな関心を寄せています。

中山平次郎は、これら収集した古瓦の出土地の特徴や時代など考え、それまで博多官内町と考えられていた鴻臚館の所在地として福岡城説を述べたり、安楽寺の創建年代に疑義を提出したりしましたが、古瓦の形式分類などはしていません。それは中山が解剖学の教授であつたからというのではなく、考古学の専門家にも共通することでした。大宰府出土の古瓦を、大宰府政庁系統の鴻臚館式軒先瓦と、観世音寺系統の老司式軒先瓦に整理し、その系譜や年代観の解明を行ったのは、小田富士雄福岡大学名誉教授の若き日の業績です。

公文書館構想調査研究委員会

副会長 高倉 洋彰